

「人生の意味についての言説はどのような言語ゲームなのか？」

久木田水生(名古屋大学)

本発表は本ワークショップのタイトルにある「分析哲学」と「人生の意味」に関わる。すなわち「分析哲学で人生の意味について語ることはできるのか」という問いに答えることを目指すものである。端的に語れるか語れないかでいえば、もちろん語れるに決まっているのだが、ここで問いたいのは「分析哲学の中に人生の意味という主題を取り入れたときに、実り豊かなケミストリーが生じるか」ということである。

しかし「実り豊か」というのも非常に曖昧な語である。例えば分析哲学には、現在多くの若い哲学者が精力的に従事しており、発表や論文の数も多い。その意味では分析哲学は現在、最も実り豊かな哲学分野の一つであろう。しかしその一方で分析哲学が社会の重要な問題に向き合っていないことや、そこでの議論がテクニカルでフォーマルな言葉のゲームのようになっていることを批判する人々もいる (cf. Unger, 2014, Wilshire, 2002)。これらの批判はある程度もつともだと思う。歴史的に哲学が「良い人生」や「良い社会」にコミットする学問だったことは確かである。Frodeman and Briggie (2016)は、しかし、あまりに多くの哲学者たちが現在そういった問題から遠くに離れてしまっていることに警鐘をならす。

「分析哲学の問題を議論することは僕自身の人生を、あるいは同じ分野の他の研究者の人生を豊かにしているぞ」という反論はここでは無視する。問題にしているのは哲学の議論がその分野の研究者以外の人間にとって何らかの意味で役に立っているかということである。この意味では分析哲学(分析哲学だけの問題ではないが)は、例えば応用倫理学などに比べて、実り豊かであるとは言えないだろう。

前者の意味で分析哲学と人生の意味の組み合わせ(以後、これを「人生の意味についての分析哲学」、略してAPMLと呼ぶことにする)が実り豊かなものになるかどうかは私には全く分からないし、さほど興味もない。APMLが多くの分析哲学者を引き寄せて分野として興隆したとしても、あるいはほとんど無視されて廃れたとして、それは歴史の偶然による(現在、形而上学の方が認識論より流行っているのに必然的な理由などないだろう)。私が興味を持つのは後者の意味で、APMLが実り豊かなものになりうるかということである。

分析哲学がテクニカルでフォーマルなロジックに終始して、「良い人生」というような重要な問題にコミットして来なかったことが批判の対象になるのであれば、APMLのような動きは当然、歓迎されてしかるべきだろう。しかしそれは手放しで肯定できるものではない。分析哲学の原点は、意味が明瞭でなく論争的になっていた言明を(しばしば形式論理学の

道具立てを用いて) 分析し、疑問の余地なく真偽が明らかな言明に直す、もしそのような明瞭化ができないのであれば無意味なものとして退ける、という試みだった。そして初期の分析哲学者たちが明瞭化できない言明の典型と考えたのが、例えば人生の意味についての言明だったのだ。従って明示的に分析哲学のスタイルで人生の意味について語るというのであれば、何らかの正当化は必要であると思われる。ただし、ここでの私の「分析哲学」のとらえ方がいささか狭すぎるという批判はあるだろう。分析哲学というのは特定の研究のスタイルを指すのではなく、文学的なレトリックを使わず厳密で明晰な論証を旨とする研究態度であるという意見や、大雑把な地理的分類・人脈による分類を指しているに過ぎないという考え方もある。それならば私は APML について何も言うことはない。しかしまさに私がここで述べたような意味で APML を実践している哲学者がいる。それが Thaddeus Metz である。

Metz (2013) は伝統的な分析哲学のスタイルで人生の意味について語ることを目指した著作である。すなわち Metz はここで、人生の意味についての言及を含む言明、例えば「アインシュタインの人生には意味があった」というような言明について、疑問の余地なく意味を明瞭化すること、それが真である場合と偽である場合を分ける明確な条件を特定することを目指した (そしてある程度成し遂げたと主張した)。しかし Metz のこの仕事は、目指したことを達成しているとみなすことは難しいし、また仮にそうだとしても決して「実り豊か」とは言えないものである。それどころか人生の意味についての言説の意味を歪曲し、かつ不当に他者の人生を貶める危険すらあるものだと私は危惧している (cf. Kukita, 2015)。

Metz は人生の意味を、客観的に実在するものをして扱い、それについての言明が明確な真偽条件を持つということを当然の前提としている。しかし上述のように初期の分析哲学者は人生の意味をそのようなものとしては捉えていなかったし、それゆえにこそ彼らは人生の意味について論じることを拒否したのである。いわば Metz は分析哲学のスタイルだけを真似て、その精神を捨てている。そう考えれば彼の試みがうまくいかなかったのは至極当然なのである。しかし Metz の理論がうまくいっていないからと言って APML の試みが不可能であると断じるのは早計である。人生の意味についての言説に関する Metz の想定は、多くの分析哲学者が (無批判に) 利用する標準的な意味理論の枠組みにのっとったものである。しかしそのような標準的な枠組みばかりが言説を理解する唯一の方法ではないということもまた、分析哲学の伝統に連なる (しかし不当にマージナライズされてきた) 一部の哲学者たちが明らかにしてきたことなのである。Metz が怠ったのは、人生の意味についての言説についての分析を始める前に、それがいかなる意味理論で分析するのが適切な言語ゲームなのかを問うことだった。しかし少し自分たちの言語実践を反省してみれば、人生の意味についての言説が、客観的な事実を報告するというような目的とはまったく異なった目的を持って行われる言語ゲームであることは明らかである。

本発表で私は人生の意味についての言説が、賞賛や非難のような、事実の報告とは異なる目的をもつ言語行為である可能性を示唆し、そのことによって (広い意味での) 分析哲学が

人生の意味のような問題について論じることの有用性を示したいと思う。

Robert Frodeman and Adam Briggle (2016). *Socrates Tenured: The Institutions of 21st-Century Philosophy*, Rowman and Littlefield, 2016.

Minao Kukita (2015). "Review of Thaddeus Metz's *Meaning in Life*," in *Journal of Philosophy of Life*, 2015, 208-214.

Thaddeus Metz (2013). *Meaning in Life*, Oxford University Press, 2014.

Peter Unger (2014). *Empty Ideas: A Critique of Analytic Philosophy*, Oxford University Press, 2014.

Bruce Wilshire (2002). *Fashionable Nihilism: A Critique of Analytic Philosophy*, State University of New York Press, 2002.